

パリ通信・第141号 2023年9月号

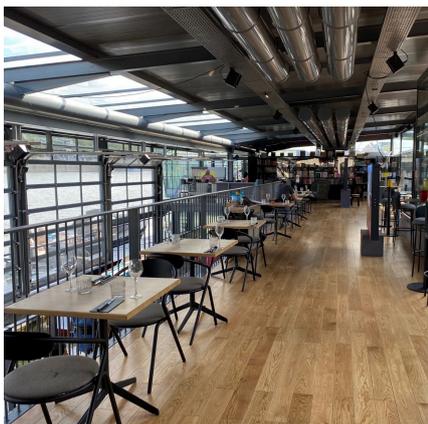
浮かぶアート

近年の異常気象は日本もフランスも顕著で、9月新学期が始まったパリに突然の猛暑がやって来た。8日からフランスでラグビー・ワールドカップが始まり、フランスも日本も第一戦を快勝し熱戦がまだまだ続きそうな暑い9月である。涼を求めてセーヌ川岸を散歩したり、カフェでおしゃべりしたり、夏の最後を楽しんでいる姿が珍しくない。



パリと言えばセーヌ川、昔からパリに物資を運んできたセーヌ川の役目は大きく、今日も朝早くにはコンテナを積載した大型運搬船が日常的に行き来している。観光船に乗る人は多くても近くまで行く用事のある人は少ない。船に住んでいる人もいるが、これからセーヌ川がクローズアップされるイベントが増えそうである。

来年2024年夏パリ・オリンピック・パラリンピック選手団入場行進が船に乗って行われる予定だ。パリ市内のインフラ工事と合わせて、セーヌ川岸の整備も急ピッチで進んでいる。浮かぶ避難所「ルイズ・カトリーヌ号」が係留されているオステルリッツ岸でもボートハウスの上下水道設置、処理を待つ下水を一時的に貯蔵する大型タンクの設置工事が行われている。



そこから上流に500m程遡ったベルシー橋の下に「浮かぶ写真アート船 (Quai de la Photo)」が先日オープンした。セーヌ川とアート、セーヌ川と住民、セーヌ川と日常をより密接に結びつけ、アートを身近に触れて、セーヌ川を楽しんでもらうというコンセプトである。セーヌ川に開かれた新しい船はガラスのオープンスペースで、船上の自由な空間を写真展、写真スタジオ、子どもたちのアトリエ、講演会、セミナー、ギャラリー、カフェレストラン、プライベート・レンタルスペースなど多目的な文化活動に使っている。

展覧会は入場無料で多くの人にアートに接してもらう。船の運営・維持費、繋留費用などの必要経費を捻出するために、岸や船内を利用したレストランやカフェ、ショップの運営、船の中に設けた小さな船着場から高級小型船でセーヌ川クルーズを提供するなど多岐に渡る収入源を確保している。12日夕刻から行われた船のオープニングではパリ市長アンヌ・イダルゴ、パリ13区区長ジェローム・クメを始め、パリ河川局などセーヌ川に関わる各機関からの挨拶があった。

この浮かぶアート船を建造し運営しているのは「ARTFLUX(アートフリュックス)」というフラン



スの会社である。「Fluctuat nec mergitur」(ラテン語で「波に打たれても沈まず」)はパリ市のスローガン

であり、そこから社名を付けている。ARTFLUX社は4年前に同じコンセプトで「ストーリー・アート」に捧げた船「フリュクチュアート」(FLUCTART)をオープンし所有している。ジャズ音楽船「大地の音(Son de la Terre)」(ノートルダム大聖堂の足元)、その隣の「ダフネ(Bateau Daphné)」号の所有者でもある。パリ市内だけで5隻、セーヌ川上に合計8隻を所有しているというから驚きである。そして、この「ARTFLUX」社がル・コルビュジエ船「ルイズ・カトリーヌ号」に出資する話が進行中だ。2020年10月浮上したコンクリート船の修復工事は遅々として進まなかった。コロナ禍の真っ最中で日本は遠くなった。新しく造船する費用の3倍かかる修復工事費の目処は全く立たなかった。ウクライナ戦争で資材が急騰し、文化事業に寄付をしてくれる団体も現れなかった。建造から100年以上過ぎた歴史の証人を次の世代に引き継ぐことができれば嬉しい。

フランスには文化財が溢れており、どこも資金集めに苦勞している。ル・コルビュジエの名前を謳っても多額の支援者には巡り会えなかった。ARTFLUXの出資が決まるにはまだ幾つかの条件をクリアしなければならないが、セーヌ川に浮かぶ船として再生の門出を迎えることができれば本当に嬉しい。

ノウハウを持った若い優秀な二人のフランス人起業家で立ち上げたARTFLUX社であるから、古い歴史の価値を現代の若い人たちに伝える活用をしてくれるに違いないと期待している。